

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 25 日現在

機関番号：18001

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2017

課題番号：15K12858

研究課題名(和文) 風の詩学：豎琴と螺旋

研究課題名(英文) The Poetics of the Wind: Lyre and Gyre

研究代表者

石川 隆士 (ISHIKAWA, Ryuji)

琉球大学・法文学部・教授

研究者番号：60315455

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：風と螺旋との符合についてW.B. イェイツの修辞の中に追求し、その結果イェイツの螺旋の修辞が一元的世界観から、多元的な世界観への変容を示すものであるという新たな検証ができ、国際学会を含む研究発表3件に加え、査読論文1件、「Noli me Tangere: “Nineteen Hundred and Nineteen”における触れる風」の成果を得た。

研究成果の概要(英文)：This study pursued the correspondence between the wind and the idea of gyre in the rhetoric of W.B. Yeats and elucidated that his rhetoric of gyre represents the transition from the monopolized world before the first world war to the diversified one of the 21st century and after. The results of the study are provided in the oral paper reading titled “Positive Perspective in the Ambiguity in Yeats’s Wartime Poem” and published in the academic paper titled “Noli me Tangere: The Wind Touched in ‘Nineteen Hundred and Nineteen.’” This study also explored and clarified the association between Yeats’s rhetoric of gyre and the historical narrative of Ireland, and the result is reported in the paper readings titled “The Sacrificing Female: ‘Easter, 1916.’” The final result of the study is presented in the paper reading titled “The Formation of the Double Gyres in 1917: The Beginning of Generative Harmony.”

研究分野：英文学

キーワード：英文学 アイルランド W.B. Yeats

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は英文学研究を専門とし、W.B. イェイツの思想を体系的に記述した *A Vision* の研究の中で展開された人間と見えざる歴史動因との対立の追究が本課題の研究の着想につながった。これまでは *A Vision* を基盤として「視覚」という観点から研究を続けてきたが、この場合の「視覚」とは単なる対象物の知覚ではなく、その対象との関係の創出に重点が置かれている。この研究はやがて「見えないものを観る」感性、換言すれば「見えないものとの関係を創造する」様式にたどり着き、その見えざる関係が風のかたちで表現されていることを追究した 2007 年の学術論文「風と存在: W.B. Yeats's "The Wind among the Reeds"」が本研究課題着想の原点となった。風という視点は神話的、科学的、哲学的といった多様な論点を結合させる可能性を秘めており、中でも本課題は、その視点をを用いて 19 世紀から 20 世紀への英語文学の流れの中に新たな変容点を特定しようとしている点において独創性を持つ。研究代表者は風の詩学の主要な基点としてイギリス・ロマン主義における「イオリアの豎琴」と W.B. イェイツの「螺旋」の修辞を追及してきた。その中で、両者の間には風を対象とするという共通点がありながら、そこに込められた秩序概念には断絶があることを見出した。その非連続性について「体系的調和」と「生成的調和」という枠組みを与え検証を行うが、それは戦争の世紀に入り大英帝国が衰退し、価値観が多様化する時期と符合しており、風という修辞がそうした時代意識に敏感に反応していることを証明する必要性があると考えた。

2. 研究の目的

本研究は自らを取り囲む空間に対する人間の意識の変遷を、英語文学における風の表象という側面から明らかにする。風の詩学とは、風にかかわる言説を体系的に分析することであり、本応募課題においては「豎琴」と「螺旋」という二つの修辞をその機軸とする。「豎琴」はギリシャ神話の昔から宇宙の体系的調和の象徴である。一方「螺旋」は混在する多様な存在が互いの関係を見出しながら実現されていく生成的な調和を表象している。特に 20 世紀以降、世界の多元化に符合するように「螺旋」は顕著にたち現れる。この体系的調和から生成的調和へ向かう表象の変遷は、自らを取り囲む空間の内なる原理を積極的に創造する意識への移行と連動していると仮定できる。この自らを取り囲むものとの「見えざる関係」を最も本質的に表象するのが風である。この風を導き手としながら体系的調和から生成的調和への変遷を追究する。

「イオリアの豎琴」に代表される自然の弾

き手によって奏でられる豎琴という修辞がロマン主義を中心として体系的調和の表象であったのに対し、「螺旋」が新たなる生成的調和の自己言及的な修辞として前景化され、風の表象として 20 世紀の初頭から「豎琴」にとって代わっていくこと、そしてその生成的調和の修辞たる「螺旋」がヨーロッパ文化の基層をなすケルト文化と符合しており、いわば再発見の形で顕在化したのであるという二点を明らかにすることに絞られる。

ロマン主義において、風が支配的な修辞であることは M.H. エイブラムズがすでに指摘しているが、マイケル＝オニールが 2007 年の *The All-Sustaining Air* において看破しているように、その風の修辞は、見えざる大気の中へ超越者を解放したに過ぎず、超越者が縋る求心的な枠組みは維持されたまま 19 世紀後半へとつながる。その与えられた秩序を解体し、破壊と生成の両義的なダイナミズムを「螺旋」で表象していったのが W.B. イェイツである。しかし、その「螺旋」のダイナミズムは鶴岡真弓氏が指摘するように、ケルト文化の感受性にすでに潜んでいたものでもあった。このロマン主義の見えざる秩序体系とケルト的感受性が見出す生成的調和との対立および変遷を W.B. イェイツを中心とした 20 世紀の風の修辞の中に追求する。

3. 研究の方法

自然表象の研究において、これまで風がその主題となることは少なかった。やや古くはなるが自然表象に関して、海、山、鳥から虫までを人文科学研究の対象として見出し、饒舌に語ったフランスの歴史家ジュール＝ミシュレも風を中心主題としたことはない。風の考察に関し、ライアル＝ワトソンが *Heaven's Breath: A Natural History of the Wind* において、その類まれなる該博な知識を展開させてはいるが、自然科学者だけに人文科学系の考察に関しては記述的なものに終始している感を免れない。また、こと文学に関しては、多くの英語文学の著作を取り上げてはいるもののほとんどが比喩に関する記述にすぎず、20 世紀の作品については、紙面上の都合ということで自ら放棄している。本研究で本格的に文学の側面から焦点を当てることとなったと考える。

風はあらゆる空間に遍在し、同時に間接的な意味での視覚を含め五感全てに訴えかけてくる。その意味で人間にとって最も身近な現象でありつつ、グローバルな視点での研究を行う共通準拠枠として重要な修辞となる。

風と「豎琴」の関係性においては、「イオリアの豎琴」の時代的特性を明確化するために、ギリシャ時代からの豎琴と世界観との関わりから調査を行い、体系的調和がいかに意識されているかを追求した。

風と「螺旋」との関係性においては、20

世紀以降「螺旋」が重要な修辞となっていることを検証するため、21世紀まで視点を広げ調査を行った。20世紀初頭から現代にいたる、より広い文脈の中でイエイツの神秘主義における二重螺旋の意義を問うた。

同時にグレコ＝ローマン文化以前のケルト文化という過去にも遡り、同文化に特徴的な意匠である螺旋文様に込められた、多様性と生成的調和のあり方も調査し、同じくイエイツの二重螺旋との関わりを追究した。そこに偶然の一致ではなく、19世紀後半から20世紀にかけてのケルト文化復興の流れにおける基層意識の再発見、再定義という文脈を明確にするためにも、最も復興運動が盛んであったスコットランドの文献を調査することで追究した。

4. 研究成果

風と螺旋との符合を W.B.イエイツの修辞において追求し、その結果イエイツの螺旋の修辞が一元的世界観から、多元的な世界観への変容を示すものであるという新たな検証ができ、その成果として2016年7月に IASIL 2016 (International Association for the Study of Irish Literatures) (於 University College Cork, Ireland) にて「Positive Perspective in the Ambiguity in Yeats's Wartime Poem」と題する研究発表を行った。

また、前年度の調査結果を踏まえた査読論文「Noli me Tangere: “Nineteen Hundred and Nineteen”における触れる風」を執筆し、2017年3月に公刊された。螺旋の修辞とケルト文化の関係については、アイルランドの歴史ナラティブの中に、生成流転する螺旋の修辞が織り込まれていることを調査、分析し、日本イエイツ協会52回大会にて「生贄を誘う女：“Easter, 1916”における畏怖という名の覚醒」と題する研究発表を行った。上記2点を統合した研究成果として2017年10月には 2017 International Yeats Society Conference (於 The New School University, NY) にて“The Formation of the Double Gyres in 1917: The Beginning of Generative Harmony”と題する研究発表を行った。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

石川隆土「Noli me Tangere: “Nineteen Hundred and Nineteen”における触れる風」、『地域文化論叢』査読有、第18号、pp. 77 - 88 (沖縄国際大学大学院地域文化研究科) 2017年3月。

〔学会発表〕(計 3 件)

石川隆土「The Formation of Double Gyres: 1917, the Beginning of Generative Harmony」、2017 International Yeats Society Conference, 2017年10月。

石川隆土「生贄を誘う女：“Easter, 1916”における畏怖という名の覚醒」日本イエイツ協会第52回大会、2016年11月。

石川隆土「Positive Perspective in the Ambiguity in Yeats's Wartime Poems」、International Association for the Study of Irish Literatures 2016、2016年7月。

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等
なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

石川 隆土 (ISHIKAWA, Ryuji)

琉球大学・法文学部・教授

(研究統括実施)

研究者番号：60315455

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

なし